
闇の中の光

白夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の中の光

【Nコード】

N1984R

【作者名】

白夜叉

【あらすじ】

一年前に江戸で起きた事件

闇の始まり

そう・・・あれは、一年前のこと・・・

『臨時ニュースをお伝えします』

「お、結野アナじゃん！」

『ただ今入ってきました情報によりますと、宇宙海賊春雨と高杉晋助率いる鬼兵隊が手を組んだとの情報が入りました。引き続き新しい情報が入り次第――――ピー――』

「高杉と春雨が・・・！」

「神威・・・アルカ？」

『第五段階警報が発令されました市民の皆様は、安全な場所に避難してください・・・繰り返してお伝えします・・・』

「銀さん・・・どうしますか？」

「お前ら、さきいつとけ、俺あここでズラと辰馬待ってなきゃなんねえから」

「いやヨ銀ちゃんも一緒に行こうよ」

「そうですよ、銀さん」

「・・・心配すんな、絶対に生きてお前らとこ行くからなあ？」

「絶対アルヨ」

「絶対ですよ銀さん」

「わあったよ」

来る時のために（前書き）

原稿復活

一日で4話分書き直しました！

来る時のために

ヅラと辰馬が来た

「スマねえな、こんな危ねええ時に」

「いや、いい」

「ところで、おんしらがわしらを、呼んだってことはそれなりの理由や考えがあつてのことなんじゃろう？」

「ああ、知つてのとおり、高杉と天人が手を組みやがった、勢力が強すぎた幕府のお偉いがたも手がだせねえらしい」

「そうか・・・」

ガラガラガラ

「オイ！万事屋居るか・・・？」

「あゝつておい！どうしたんだよ土方」

そこには、血だらけの土方と血だらけの沖田を必死に背負う血だらけの山崎それを支える近藤がいた

「少し油断したただけだ。俺より総悟と山崎と近藤さんの手当てを頼む」

「ああ、それと前もな、オイ！ズラ辰馬手伝ってくれ」

「ズラつて桂がいるのか？」

捕まえる気満々の顔で俺を見ている

「今、手当てが先だからなあ。土方君」

文句がありそうな顔で俺のことを見ている。俺がうなずくとまだ、文句ありそうな感じで土方もうなずいた。

「よし！奥の部屋行くぞ」

新八がいらないから3人で手当てを行つた

沖田君と山崎の怪我が思ったよりも深刻だった

沖田君は、刀傷が多くて

山崎は、刀傷もあれば腹部に玉を打たれた箇所が何か所もあった
ここまで沖田君を背負つて来られたのがすごいぐらいの傷だった

土方は、腹部とほほに刀傷が少し

来る時に

3人の手当てが終わった

「すまねえ世話になっちまって」

「いや、いいよ。それにズラのこと見逃してもらっちまったし」

「恩に着る・・・」

桂が頭を下げる

「・・・今回限りだぞ・・・」

渋い顔で土方が答えた

続けて土方が

「ところでなんでお前たち三人が集まってんだよ、お前らただの幼馴染じゃねええよな」

問いかけてくる

「ああ・・・」

曖昧な返事で答えを返す

桂が答える

「今高杉のことを話し合っていたところだ」

「高杉もなのか」

「ああ・・・」

次に俺が答える

「幼馴染なのは、俺とズラと高杉だけだ。坂本は、途中で知り合った」

その答えを聞いて土方が眉を寄せる

「お前たちに何があったのかどうしてこうなっちまったのか教えてくれ」

ズラと顔を見合わせる

「どうしてこんなことになっちまったのかは、わかんねえけど。今なら過去に俺たちに何があったのかをそろそろ話してもいいのかもなあ・・・」

しばしの沈黙が続いて、銀時が口を開いた

「お前らも、そんなとこ立ってねえで中入れやあ」
振り返ると。新八ちゃんと神楽殿がいた

「はい・・・」

過去の記憶

屍の山の中で一人握り飯を食らう子供が一人いた
その子供に近づいてくる物がいた

『屍を食らう鬼が出てくると聞いてきてみれば・・・君がそう？』
と、優しくそうに子供に問いかける大人

続けて

『また、ずいぶんとカワイイ鬼がいたものですね』
と、子供の頭の上に手を置いて笑う

子供は、その手を払いのけて腰に差した刀を抜いて構える。刀は子供より何倍もでかい

『刀も屍からはぎ取ったのですか？童一人で屍の身ぐるみをはぎ、
そうして、身を護ってきたのですか大したものじゃないですか』

感心したように笑いかける大人
少し真剣な顔をして

『そんな剣もういりませんよ他人におびえ自分を護るただけにふるう剣なんてもう、捨てちゃいなさい』

そういうと自分の剣に手をかける大人

警戒する子供

『くれてあげますよ、私の剣』
ひょいっと自分の剣を投げる大人軽く腰を抜かす子供

『剣の本当の使い方を知りたいきやついてくるといい。これから、
そいつをるいなさい』

そういうと大人は、子供に背を向けた

『敵を切るためではない、弱き己を切るために己を護るのではない
己の魂を護るために』

そういつて大人は、歩き出した。

子供は、驚いた眼をしている。子供は、古い剣を捨てて新しい剣を
手に取って大人に向かって走り出した。

君の名は・・・

『君の名前は？』と優しく大人が子供に問いかける

「ぎんとき、坂田銀時」

大人は、にっこりと笑って

『そうですか。銀時いい名前です。私の名前は吉田松陽といいます。よろしく銀時』

にっこりと笑って松陽は、銀時の頭のうえに手を置いた

『銀時の髪の毛は、きれいですね』

銀時は、びっくりした。

子の髪の毛の色でけなされることは、何度もあったでも、ほめられたことは、初めてだった。とっても嬉しかった

『どうしました？何か嫌なこと言いましたか？』

心配そうに松陽が聞いてくる

首を横に振った

でも、言葉は、出なかった

悲しかったんじゃないうれしかったんだ

「あ、ありがとう」

松陽が笑いながら言った

『帰ったらまず、お風呂に入りましょう』

「う、うん」

『塾に行ったら友達がたくさんできますよ。』

「友達？」

『そう友達です。今は、まだ遊んだりするだけの中かもしれないが、銀時が大きくなったときに助けてくれたり、一緒に戦ってくれる仲間のことです』

いまいちよくわからなかった

でも、大切な人だってことは、わかった。

小さな友達

風呂に入った後きれいな着物に着替えて松陽と二人で歩いていたら向こうから髪の毛の長い男の子が来た

「先生！お帰りなさい・・・？先生その子は誰ですか？」

『ただいま、小太郎。この子ですか、この子は、今日からこの塾でみんなと一緒に勉強を共にする銀時ですよ』

銀時は、はっとした顔をで松陽を見る。

松陽は、満面の笑みで

『どうしたのですか？』とわざとらしく笑ってきた

「そうですか。」

俺のほうを見てこう続けた

「よろしく。俺は、桂小太郎だ。よろしくな」つと

笑ってきてくれたどうしたらいいかわからなかった。そしたら、松陽が

『銀時も自己紹介をなさい』と言ってきた

「おれは、俺は、坂田銀時だ・・・よろしく・・・」

「うん。」桂は笑顔でうなずいた「よろしく銀時」

うれしかった初めて自分と同じ年の友達ができた

「こっちこそよろしくな”ズラ”」

この時から桂のあだ名が”ズラ”になった

俺たち二人がじゃれている時松陽は、ただ嬉しそうに、静かに見つめてくれていた。

こいつが俺の初めての友達、桂小太郎だ。

そのあと松陽と別れてズラと二人で教室に行った

俺席は、縁側のそばにあるとても太陽が当たる場所にあった

二人目の友達

教室に行ったらそこには、俺と同じぐらいの年の子供たちがいた
みんな不思議そうに俺の事を見てくる

俺が戸惑っていたら

桂が一步前に出てくれた

「みんな、こいつは今日からみんなと一緒に勉強をする銀時だ」

桂は、振り返るとやさしく笑ってくれた

「ありがとう、ズラ・・・」

一番後ろの席に座ろうとしたら一人の子供が声をかけてきた

「おい、お前どこから来たんだよ。松陽先生になんかしてねえだろ
うな」

身長は、俺より低くてまるで女の子みたいな奴だった

「おい、高杉やめろ。銀時は、松陽先生が連れてきたんだ」

「本当か、桂」

桂が説明してくれた

「誰だかしんねえけど、ズラが言ってることは、本当だ。あの人が
俺を拾ってくれたんだ」

そういうと

そいつは、笑いながら俺の事を見てきた目に涙を浮かべながら

「そうか、すまねえ。プップ、桂がズラか。お前面白いな、俺の名
前は、高杉、高杉晋助だ

よろしく。銀時」

こいつが俺の二人目の友達

大切な大切な友達

これが、俺たち3人が始めてそろった日

あの人が俺を拾ってくれたから

出会えた友達

絶望の始まり

じゅぎょうには、でた一応

まったく話は、聞いていなかったけど

剣術の授業は、誰よりも真剣に必死に受けた

そんな毎日が続けていた

ある日の午後、松陽に言われてズラと高杉と三人で街にお使いに行
った

『ツチ餓鬼は、逃げやがったか。松陽さんよあんたが大人しく幕府
に来てくれさえすればこんなところに押し付けてきたりなんてしなか
ったのによ』

『そうですかあ。子供たちもないことですから、いきますかね』

『おおそうだよ松陽さん最初っから来てくれてら良かったんだよ』

『フフ、そうは、行きませんよ。子供たちを置いてそう簡単に行け
ませんからね』

『まあさっさと行きますよ』

『先生！』

『!どうして、あなた達がここにいるのです。』

「財布取りに来た

ウソだこの人のことが心配になって3人で帰ってきてしまっただけ
のことだ

『そうですか今から私は、この人と一緒に幕府に行ってきますから、
しっかりと留守番頼みますよ』

今ここでこの人を行かせてしまったら、もう二度と会えない気がし

た。

「あんた、ちゃんと帰ってくるんだろうな」

『さああ』

なんだよその答え俺は、ちゃんと真剣に聞いてんだよ

『松陽先生よこいつらとの最後のあいさつは、終わったかい？
今から死にいくんだから（・・・・・・・・・・）』

「松陽先生が何か悪いことしたっていうのかよ。」

『いいですよ。晋助私には、あなたの気持ちだけで十分ですから』

「よくないですよ、先生。どうして先生が殺されなきゃいけないんですか」

『仕方ないことなのです。幕府の人たちは、私のことを気に入っては、いなかったようですから』

『さあ行くぞ』

「待てよ」

『銀時？』

「その汚い手をどけろ、その汚い手でその人に触れるな！」
松陽からもらった剣を構える

『生きのいい子供は、好きだが、何しろ時間がねえんだよ。早くこいつの死刑を（・・）』

はじめなきや何ねえんだよ。すまねえな餓鬼お前の相手をしてる暇は、ねえんだよ

これで、終りだ』

ズッシュー

ツバタ

『銀時！』

『これで終わりだ、いいな』

「ま、まだだ。まだ終わっちゃいねええよ」

『しぶとい餓鬼だ。まあいい。少し相手をしてやろう』

『やめなさい、銀時。もういいのです。もうもう。私は、あなたがそんなにもやさしく育ってくれただけで、あなたに心を置ける友達ができただけでそれでいいのです。私は。』

「よくねえよ、まだ何にもよくねええ。まだ、俺は、あんたに何にも返してねえよ。まだ、あんたのことちゃんと名前で呼んだことねえし、よくねええんだよ」

『おい、餓鬼こっちから行くぞ。時間がねえってんだろ。』

グッサグッサ

ズッシュー

もうすでに、銀時は、ボロボロだ

『おい、餓鬼その辺でやめとけ、お前死ぬぞ』

バタ

「せ、せん先生。 松陽先生」

『ありがとう。銀時ありがとう晋助ありがとう小太郎。 ありがとうありがと』

小さな決意

俺が、次に目を覚ました時には、布団の上だった

あたりを見回すと、そこには、ズラと高杉がいた二人は、とても泣いていた

声をかけようにも、声が出ない

頭を撫でてやりたいのに、体が動かない

その時、ズラが俺に気づいてくれた。涙を拭いて俺に話しかけてくれた

「おい、銀時目を覚ましたか？あれから、ずっと眠っていたんだぞ」

「せ、せんせいは・・・」

やっと声が出た。酷く小さくてかすれた声が、ズラには俺の声が、聞こえているのだろうか

「先生は、あの後天人に連れて行かれて戻ってきていない・・・」

ズラの顔は、とても悲しくて今にも泣きそうで・・・

『おい、出てこい。』

『そうよ、早く出てきなさい』

『ここに、鬼の子を隠しているのは、知っているんだぞ』

『太一早く出てきなさい。化け物まじななんかと一緒にいるんじゃないの』

『その、化け物のせいで、この先生は、殺された（……）んだぞ』

先生が殺された……嘘だ……俺のせい……？

「銀時行かなくていい、お前のせいなんかじゃない、悪いのは、全部天人なんだ」

ありがとう、お前がそうやって言ってくれるだけで本当にうれしかった

「おい、ズラ。ほかの餓鬼連れて、村のほうまで行ってる。後、高杉もだぞ」

「テエメ、一人で何するつもりだ」

「俺を誰だと思ってる『坂田銀時様』だぞ。俺がこんなところで一人で死のうと何ぞおもっちゃいねえし

外にいる奴らと一人でやりあおうなんておもってねえ

何しろ、子供には、親が必要だからな」

「わかった、村はずれにいる。お前もすぐに来いよ」

辛い(前書き)

今回で過去編終わりです。

辛い

「これが俺たちの過去

それから、俺たちは、攘夷戦争に出た。そこで坂本たちに出会った

戦争では、たくさんの仲間が死んでいった

その戦争で、俺と高杉は、あったんだ

先生を殺した天人に

黒夜叉に逢ったんだ。そこで高杉が左目をやられた」

「そんなことがあったのか・・・」

「それから、あいつは、幕府を憎んでやがる」

「理由は、わかったが、今回は、高杉何をやるつもりなんだ

あいつが一番憎んでいるはずの天人と手を組んで」

『何をつて、俺が教えてやるよ。銀時』

『高杉』

来る（前書き）

高杉キヤラ崩壊中

来る

刀を構える真選組一同

銀時 桂 坂本

それに対して、へらへらと笑っている、高杉

その横にいるのは、神楽の兄、神威だ

「よお銀時にズラ、辰馬も、元氣にしてやがったか」

「テエメえこそ元氣にしてやがったか」

「フツまあそれなりにな」

「高杉ところでめえ、何しにきやがった」

「フツお前らを殺しに来たんだよ」

「ツハ、死にに來たの間違えじゃねえのか」

「ねエまだ？まだ殺しちゃけないの？」

暇そうに、高杉に質問する神威

「あ、君まだ死んでなかったんだね、今度こそ俺が殺してあげるよ」

土方にとびかかる神威、土方を守る銀時

「邪魔しないでよ、お侍さん」

神威の目的が土方から銀時に変わった

そこで、しびれを切らしたかのように

天人たちが、いっせいに部屋に飛び込んできた

楽しむ？

「お侍さんは、どうしたら、本気になってくれるのかなあ」

「俺は、いつでもほんきだあ」

「そうだった、あんた達侍は、守るべきもの傷つけられたときに、強くなるんだったよね」

神楽のほうに、刀を向ける神威

「神楽、俺は、弱い奴とやりあうより、強いお侍さんとやりあったほうが

俺は、楽しんだよ。だからお前には、死んでもらうよ」

刀を振り下ろす神威

「やめろおー」

銀時の叫び声が万事屋に響き渡る

神楽の血を、浴びた神威が近づいてくる

「これで、少しでも、やる気になってくれた？」

「ざけんなあ・・・ふざけんじゃねー」

「これで、本気になってくれたようだね。さあ楽しい殺し合いの時

間だ」

「何が、面白くてこんなことやりやがる」

「殺し合いが、楽しいだけさ、おれは」

「神威、そいつを殺すんじゃないぞ」

「なんだよ、殺しちゃいけないのかよ。つまんないなあ」

本気

プツン

何かが、切れたかのような小さな音が、僕には聞こえた気がした。

神楽ちゃんが、神楽ちゃんがやられた・・・嘘だ嘘だ

なんで、あの人は自分の実の妹を、傷つけて正気なんだ

なんで、そこまでして、銀さんを殺したいんだ。

銀さんが、何か悪いことしたっていうのかよ・・・

僕は、銀さんのほうを見た。

銀さんは、何かが切れたように

静かに、黙って一点を見つめていた、その先には、神威がいた。

二人の周りには、ピリピリとした空気が張りつめている。

銀さん以外の僕たちは、何もすることができない

二人の間に、飛びかかろうとする天人を斬りつけることしかできない

「お待さんやっ和本気になってくれたようだね。役に立たない妹で

も、こんな時に役に立つんだね。」

神威は、自分の手についた血をなめながら、楽しそうに笑って銀時を見つめている。

「てえめえ・・・」

銀時は、神威にとびかかる。

今度こそ、本気の殺し合いが始まった。

天人たちも、次第に場の威圧感につぶされていって

二人に近づかなくなった。

戦い

「これが、白夜叉の力か。ずいぶんと、面白い戦い方するんだね。」

銀時は、口を開かない

銀時は、本当に怒っていた。神楽のことを傷つけたこともあるが、たかすぎのことも

怒っていた。

次第に、二人の力がぶつかり合いできた傷が、増えていく

「これでおしまいだよ。」

銀時に刀を振り下ろす。

銀時は、逃げなかった。正面から刀を止めにかかった。

「銀さんむちゃだ」

刀は、銀時の腹に刺さった

しかし、神威がその刀を抜こうとしたら、刀は抜けなかった。

銀時が、笑いながら刀を握っていた

手からは、血が出ていた。

銀時は、笑いながら自分に刺さった刀を抜き、神威を斬りつけようとしていた。

目には、少し殺意が込められてた。

『やめて。銀ちゃん』

神楽の声を聴き我に返る銀時。その隙を見て落ちていた刀を拾い銀時を斬りつける。

そこで勝負がついた。

今にも、息が絶えてしまいそうな銀時に、高杉が歩み寄り

声をかけた

『弱くなったなあ銀時、明日の夜ターミナルで待ってる。今日みたいなことを

繰り返したくねえんだったら、一人で来いよ、待ってるぜ』

僕たちの位置からは、声は聞き取れなかった。

銀時が、血を吐いて倒れた。

銀時に駆け寄る。

「銀さん」「銀ちゃん、ごめんごめんよ」

「ああやまんなよ・・・」

かすれそうな声で、かぐらの頭を撫でる

そこで、銀時の意識は、闇に消えた

迷い

俺は、あいつの前であいつの兄貴を本気で殺そうとした。

たった一人の兄貴なのに・・・俺は、俺は

殺そうとした・・・

あのまま、神楽がとめてくれていなかったら、俺は絶対に殺していた

今度は、絶対殺してしまう。

俺が行ったら、あいつのたった一人の兄貴を殺しちまうことになる

俺が行かなかったら、今度は俺一人が傷つくだけじゃすまねえ

また、神楽が辛い目にあうだけだ

どうしたら・・・

『お前は、こんなこにいちやあいけねえんだよ、お前は不幸を呼ぶ
化け物なんだよ、

高杉が来たのは、お前を狙ってだろ？お前さえ、お前さえ

いなかったら誰も傷つくことなんてねえんだよ。お前の周りにい
る奴は、不幸になって
いくんだよ

先生が死んじゃったのも、仲間が傷ついたのも全部全部お前のせいなんだよ。

銀時、お前がここにいるから、傷つくやつがいるんだよ

おれもその一人だ。

なあ銀時まだわかんねえのか、お前が邪魔なんだよ。

お前の存在が』

そうか、俺がここから消えれば誰も傷つかなくてすむんだよなあ

闇に落ちる

『来ると思ってたぜ、銀時。』

高杉は、いつものように一人でキセルをふかしていた。

『本当に一人できただろうな』

本当に本当に一人だった。もうあいつらを傷つけないと決めたのだから。

「ああ」

少し歩くたびに、傷が痛んだ。体の傷も、あいつらを傷つけてしまったと思う心の傷も。

痛くて痛くてたまらなかった

今にも、泣き叫びそうになった。

いま、『あの人』にやさしい声をかけられてしまったら・・・

『なあ銀時、おまえここに來たってことは、こっちにくる氣になったのか？』

本当は、そんな氣なんてこれぽっちもない。でも、俺が行けばあいつらが助かるのなら・・・

俺は、どこにでも行こう。

「ああ」

きっと今のおれの顔は、きっと情けない顔だろう。

今にも泣きだしそうな子供のような。

「おれが、俺が行けばあいつらに、手は出さないんだよな」

俺なんかより、あいつらのことを一番に思っていたい。

『っフ。おまえの働き次第だ』

言葉よりも

窓から入ってくる風の音に目を覚ました時には、あの人はもう、いなかった。

不思議と、あの人が何を考えて出て行ったかがわかったような気がした。

きっと、僕たちを傷つけないようにとして、あの人ながらに一人で考え出した答えなんだろう、

きっと。

「なんで、なんで銀ちゃんいないアルか」

僕の後ろから、神楽ちゃんの声が聞こえた。きっと今振り返って、神楽ちゃんを見たら

戸惑いを隠せない顔をしているんだろう。その顔を見て僕は、何と言ったらいいのだろう。

「新八、銀ちゃんどこ行ったアルか。トイレアルか？」

今、本当のことを伝えていいのだろうか。きっとこの子は、自分のことを責めるだろう。

「どうしたんだ。新八君。」

「近藤さん・・・銀さんが」

それだけの言葉で、きっとこの人はわかってくれたのだろ。ほかに、何も聞いてこなかった。

「そうか。行っちゃったか」

どこか、遠くを見つめるように、独り言のように、つぶやいた。

「今は、寝ろ。また、明日だ。いろいろ考えるのは」

僕たちには、この言葉に背く気持ちもなかった。

きっと、僕が思っていたことの半分は、近藤さんに伝わったのだろう。

近藤さんは、きっと僕たちが眠った後も、一人起きていたのだろう・

「前言撤回」この言葉がよく似合う。近藤さんは、すごいかっこをして寝ていた。

起きてきた近藤さんの話では、今日は今後の作戦を立てて、明日から行動らしい。

なるべく早く、あの人を見つけに行きたい。

この、気持ちはみんな一緒なんだろう。

思う

怒っているだろうか、俺が黙って出てきてしまったことを

気にしているのだろうか、俺が怪我をしたことを

泣いているのだろうか、俺のことを思って心を痛めてくれているの
だろうか

きっとあいつらは、何をしてでも俺のことを探し出そうとするのだ
ろう

いくら傷つこうと、どれだけつらい目にあっても

みんなで俺を探しに来るのだろう

あいつらが、傷つくのだったら探しに来てもらうことなんて

俺は、望まないのに……

『おい、銀時』

高杉に名前を呼ばれ我に返る。

『おい、こっちに来てみる銀時』

高杉についていくと、そこには一面真っ白な部屋があった

『ここが、今日からテメエの部屋だ、好きに使え』

それだけ言って、高杉はどこかに行ってしまった。

気がおかしくなってしまうくらい部屋は、白かった・・・

好きに使えというが、どう使えばいいのだろう

ここから出ることは、俺にはできないことだし

てか、ここはどこなんだろう

紅桜の時に来た、船の中なのだろうか・・・

カムイは、どこに行ったのだろうか

仕事（前書き）

WHO is 高杉??

まったくもって高杉のキャラがわからない

仕事

この白い部屋で俺は何をしているのだろう・・・

何がしたくてこんなところに俺を閉じ込めておくのだろう・・・

『オイ、銀時。仕事だ』

きつとろくなことではない。普段の俺なら言い返すことも出来るのであるが

今は、ぐっと耐えるしかない。

高杉についていくと、そこにはたくさんの天人と攘夷志士たちがいた。

「おい、あいつが噂の白夜叉か。なんだってあの桂と二人で、春雨をつぶしにかかったらしいぞ」

こんな声が天人のほうから聞こえたと思うと

「白夜叉さまだ、われら鬼兵隊の勝利は間違いない」

こんな声が攘夷志士たちの間から聞こえてくる。

『おい、銀時おまえこいつらと手を組んで、幕府をつぶせ』

こいつは、何を言っているんだ。

『今回の、仕事はこいつらと一緒に、真選組をつぶしてこい』

だめだ、きっとそれは俺にはできない・・・

俺には、真選組のやつらも、あいつらと同じくらい大切な存在なんだよ・・・

目の前に

一方自分たちが狙われているとは、知らない真選組では、銀時たちを探す準備をしていた

隊編成もままならない状況だった、こんな時に襲われたら、ひとたまりもない

今日は、指揮をとるために、土方をはじめ真選組の隊長たちは屯所に集まっていた。

「一番隊は、沖田抜きで隊を作れ。二番隊は、一番隊と同様抜けた隊員分の新しい配置を考えろ」

土方のときぱきとした指令が響く

日も落ちかけたころ・・・

『貴様ら何をしている。お前らは、』

そんな隊士の声を聞きつけ次々と隊士たちが集まってくる

そこにいたのは、銀時率いる攘夷志士だった。

攘夷志士の一人が声を張り上げ叫ぶ『我らは、貴様ら幕府の犬を倒し、しいては、

幕府討伐を目指す。今から我らが幕府の犬に天誅をくださん。』

誰が言ったのかは、わからなかったがどこからともなく『いけー』の一言が聞こえてきた。

次々と隊士と攘夷志士たちがぶつかり合っていく。

遅れてきた、土方たちも目の前の光景に目を見張る。

目の前には、自分たちが捜していた銀時が攘夷志士を引き連れて目の前にいるでは

ないか

「よお、大串君」

いざ参る

「てめえこんなとこで何してやがる」

銀時は、黙ったまま答えない

「黙ってねえで答えろ、何の真似だ」

張りつめた空気が立ち上る、そこでやっと銀時が口を開いた

「聞いてなかったんだったら言ってるよ。『俺らは、お前ら幕府の犬を倒して

幕府討伐を目指す。今から俺たちが、幕府の犬に天誅をくだすんだよ。』」

先ほどの攘夷志士たちが言っていたことだ

「そんなこと聞いてんじゃねえ、お前がここで何してんのか聞いてんだよ

あいつらじゃねえ、おまえの答えを聞いてんだ、黙って消えたと思っただら、てめえは

何考えてんだよ」

少し考えてから、銀時は口を開いた

「俺はてめえらを殺しに来たんだよ、俺ア後ろで戦ってる、かわいい後輩たちの味方してるだけだぜ」

この言葉で、土方たちはすべてを理解する。

銀時が着ている、白装束

手に握られている、真剣

銀時コイツがあのだの伝説の攘夷志士『白夜叉』だということ

こいつは、本気で俺たちを、幕府をつぶしに来ていやがること。

銀時コイツが攘夷戦争に参加していたこと。

『白夜叉殿、こっちは大方片付きました。こちらのほう、援護なさ
いましょうか』

「いや、いい。こいつらには、俺一人で有分だ、あとは残りの隊士
をつぶしとけ」

『はい、白夜叉殿』

伝言を伝えに來た攘夷浪士が帰っていく

「そうかあ、俺たちの相手は、てめえ一人で十分なのか
「ずいぶん俺たちも、なめられたもんですねえ」」

すでに、土方たち剣を構えていた。

「俺一人で十分なことに嘘はねえよ」

銀時も刀を構える、いつもの木刀とは違う、手には真剣が握られて

いる。

刃先は、峰打ちに構えられている。

「本気で来いよ、なに手エにいてやがんだ」

そういわれると銀時は、刀を持ち替える。

『攘夷志士白夜叉、いざ参る。』

力の叉（前書き）

力のしゃではなく

力のさと読みます。

力の差にすると、少し悲しいので・・・

白夜叉にちなんで、これにしました。

力の叉

近藤囲む隊士たちは、次々に切られていく。

でも、誰一人死んではない。

一撃で、隊士たちの刀を叩き落とし、腹に重いこぶしを入れていた。

その光景に、確かに背水が凍る。

『来いよ、鬼の副長さんよ。』余裕の笑みを浮かべながら、手招きをしてくる。

土方たちに先ほどまでの余裕は、ない。

「なあ万事屋。」口を開いたのは、近藤だった。『なんだよ』

「お前は、どうして本気でこいと言っているのに、真選組^{うち}の隊士を殺さないでくれるん

だ？他の奴らは、少なくとも致命傷は負わしているはずなのに」

いつもの、近藤のリズムで銀時に質問してくる。

銀時は、そのリズムに乗ることなく自分のリズムで答える。

『こんなことで、誰かが死ぬのはバカげていやがる。』

悲しそうな顔で答える。でも、すぐに元の顔に戻る。

『でも、お前たちは別だ、ほかの奴らに比べりやまだ、強いほうだからな』

また、先ほどの笑みに戻る。と、同時に沖田に刀を向ける。

『まだ、総一郎君とは、真剣にお手合わせしたことなかったよなあ』

「旦那、総悟ですぜえい。旦那奇遇ですなあ俺も、旦那とお手合わせ願いたいと思っていたところなん できあ」いつもの調子で沖田は、会話を続ける。

『いいぜ。どっからでもかかってきな』いつも通りの、リズムで会話を続ける銀時

「行きますぜえい、旦那」一気に、銀時に襲い掛かる。刀と刀の交わる音が響き渡る

沖田が本気で繰り出した一撃を、いともなく簡単に受け止める銀時少しの間も置くこともなく、次は銀時が一撃を繰り出してくる。

沖田の一撃とは比べ物にならないぐらいの。沖田のほうは、銀時の攻撃を受けて立っているのもやっとただ。

でも、確かにあの一撃で沖田は相当食らったはずだ。いきなり銀時がつめよってきた

間を開けることがなかったせい、か、沖田は体制をとることができなかった。

だが、銀時は一撃を下すことはせず。太もも、腕に刀を突き付け、沖田の後ろに回り込み
首に一括を下した。

特に大きな概要を与えることはしなかったが、銀時が下がった瞬間
沖田はその場に確かに崩れ落ちた。

誰もが驚きを隠せなかった。だが、近藤だけは驚くことなく黙って
何かを考えながら
見つめていた。

（あいつ、あの一撃で総悟の神経を、正確に狙ってきやがったか）
崩れ落ちる沖田に山崎が駆け寄る

「まだだ、まだ終わってませんぜえ旦那」だがその言葉を制したの
は、近藤だった

「総悟、やめておけ、このままいくとお前死ぬぞ」『そうだけ、沖
田君。ジミー早く連れて行け』沖田

は、不本意そうだが自分の体のことは自分が一番わかっているのか
何も言い返すことなく、山崎に支えられながら、下がっていった。

『次は、お前が来るのか？』土方に問いかける。

お前が望むなら、俺がお前を殺してやるよ。と言って土方が一步前
に出る。

闇の訪れ

お互いに刀を構えあった時に、先ほどとは違う攘夷浪士が走ってきた。

『すいませんが、白夜叉殿。晋助様からご伝言を預かってまいりました。』

その攘夷浪士が銀時に小さな手紙を差し出す。

手紙を見た瞬間、銀時の顔色が変わった。

『残念だがあ、今日は、ここでしめえだ』

一気に殺気を解き、刀を鞘にしまう。「おい、逃げんのか」

『わりいがお前と遊んでる暇はねえみてえなんだよ』

銀時が土方たちに背を向けて、帰っていく。

先ほどまで倒れていたはずの、一人の隊士が落ちている刀を、拾い銀時に走りよせる

「やめろおー」土方の声が銀時に届くころにはもう、刀は銀時に刺さっていた。

銀時が振り返るころには、もう隊士は攘夷浪士によって、切られていた。

『白夜叉殿、大丈夫ですか』銀時に尋ねる浪士は心配そうに銀時に尋ねる。

『ああ、大丈夫だ。急ぐぞ』『はい、白夜叉殿』

歩く銀時の後姿はすごく痛々しかった。刺された個所からは、すでに血がにじみ出ている。

銀時は、刺されたことなど気には、留めなかった。

初めてではない、何度もこんなことは経験している。もう不思議と心は痛まなかった。

流れる、血を先ほどの浪士からもらった包帯で留めながら、高杉のもとに帰えった。

『おい、銀時。ずいぶんとなさけねえ面してやがるじゃねえか。銀時、

次真選組をつぶしてこなかったら、命はねえとおもえ。チャンスは、次が最後だ。』

銀時は、高杉に案内されながら自分の部屋ではないところに連れていかれた

その部屋には、小さな台と一つの箱が置いてあった。

『おい、銀時そこに寝ろ。』高杉に言われたとおりに、台の上に横になる。

両手、両足を拘束器具のようなもので、抑えられてしまい身動きが取れない

『何の真似だよ、高杉』 『お前にこれを打つのさ』 高杉が持っているのは、

赤い液体の入った注射器だった。

闇に逝く（前書き）

今回のタイトルは、「やみにゆく」です。

この、逝くは亡くなった人に対する漢字、なのですが

銀さんの、人格が死んで。白夜叉の人格が現れるということなので

この漢字になりました。

闇に逝く

抵抗するまもなく、高杉が近づいてくる。

『何するつもりだ』その問いかけに答えることなく、銀時に注射針を刺す。

針の刺さる痛みは感じたが、ほかに何も感じなかった。

針を刺し終わると、高杉は何も言わずに部屋から出て行ってしまった。

まだ、手足を押さえられたままなので、自由に動くことができなかった。

高杉が、部屋から出て行って5分もたたない頃に、銀時の体に異変が起きた。

体中が熱くて、体中が痛くて、意識が薄れていくような感覚に落ちいった。

先ほどの、真選組襲撃の際受けた傷が、開いたのか、とめどなく血が流れる。

そのせいで、余計に意識が薄れていく。

そこに、高杉が入ってきた。『十分薬が効いたようだな』銀時の横に座り、苦しむ銀時を見ながら、笑っている。

なぜかわからないが、目からたくさんの涙があふれていた。

訳は分からなかった。体が痛いから出てきたわけでは、なさそうだ。

銀時の、涙をぬぐいながら高杉が言う。

『お前に、真選組をつぶすことができねえなら、“あいつ”にやっ
てもらうだけだ。』

銀時の意識が、完全に落ちる時に高杉は笑いながら、去って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1984r/>

闇の中の光

2011年12月1日21時53分発行